

# 人と繋がるーわたしの原点

## 服部学長にインタビュー

太平洋戦争末期、岡山の小さな山村に4歳で疎開、村中の人に可愛がられました。豊かな自然に囲まれ、せかされることなく、のんびりと満ち足りた子供時代でした。

服部祥子カレッジ学長は、ソファにゆったりと腰かけ、時折、遠い目をしながらインタビューに応じてくださいました。約束の1時間を大幅に超え、2時間余り。5月22日、頌栄短期大学でお伺いした内容は次の通りです。

### ◆先生の生い立ちとは？

私は昭和15年、大阪市に生まれました。同20年3月10日、東京大空襲のあった日、東京・吉祥寺から遠い親戚を頼り、岡山市と津山市の中間に位置する山あいの九谷という集落に疎開。父は陸軍軍医で、敗戦後、九谷に戻った。父母、祖母、姉3人と私の7人家族。医者のない地域で、腕の良い外科医の父の評判を聞いて、患者さんが押し寄せた。集落は、公会堂を住居として一家に提供、診察室にもなった。

### ◆どんなお子さんでしたか

小学校は遠くて往復2里。小学校へ通う途中、しゃべらない子で、ニコニコしているだけ。物語を語るのは得意で上級生にもせがまれた。大抵、寄り道をし、川で魚を獲ったり、わらの山で昼寝、心豊かに暮らす事ができた。

### ◆医学部精神科を選んだのは何故？

姉3人が医学の道に進まなかったため、母に強く勧められて、岡山大学医学部を受験。どっちみち落ちるだろうと思っていたら合格してしまった。岡山大ではグループに別れ、診療各科を3週間ずつ回り、勉強する。学生1人が患者1人を受け持つ。精神科で受け持った初老の女性は、入院から2年たつのに、一言もしゃべらない。カルテには「小豆島出身で大阪で暮らしたことがある。子どもは1人。離婚している」位しか書いてない。日がな1日、無表情で窓の外を見ていた。わたしもこの患者に寄り添い、じっと黙っていた。3週間たつと「あんた結婚しとるの」「あんたいくつ」と話しかけてきた。自閉の壁が溶けたのだ。この時、「人は人。必ず繋がる事がで

きる」と痛切に感じた。私の原点である。

インターンの時、結婚。主人が大阪勤務だったため、大阪大学精神科教室に所属、公立病院に勤めた。

外科医なら患部を切り取ればなおす事ができる。しかし、精神科医は何もできない。患者に寄り添い、心を溶かすしかない。約40年、現役だったが、1人の自殺者も出さなかったのが密かな誇りだ。

### ◆カレッジ学長になられた経緯は？

灘神戸生協の創立者、賀川豊彦の流れをくむ御影の東神戸教会の信者で、亡くなられた今井前学長もこの教会の信者だった。先生とは親しくして頂き、尊敬申し上げていた。昨年、今井先生をお見舞いした折「カレッジを頼んだよ」といわれた。ことし2月、多くの方々に推され、学長になった。今井先生の末の末の弟子がおこがましいと恐縮している。

### ◆ボランティアとは何でしょうか

①正しいと信じることを自らの意志と力でやり抜く②人と連帯し共同体意識を持つ③無償でやる。物質的な見返りを求めないーことでしょう。厳しい競争社会の今、さびしい人があふれている。信じる社会をめざし、ともに生きることが何よりも大切。例えば週末里親制度がある。父にも母にも捨てられ、児童養護施設に入っている子どもがいる。週末、親が迎えに来て家に帰れる子どもがいるのに、この子たちはさびしく施設で過ごす。里親は毎月、1回か2回、週末に決まった子どもを家庭で預かる。子どもを「お帰し」と温かく迎え、可愛がり、施設に帰る時には、おみやげを持たす。物を壊す、大便を壁になすりつけるなど手に負えない4、5歳の子が、里親に慈しまれ、心底うれしそうにし、笑顔がこぼれたという。里親もそうだが、ボランティアは細く、長く続けることが大切だ。

### ◆グループ〈わ〉に何を期待しますか

なすべきことをなし、会社、役所、商売など現役生活を終えてカレッジに入学、卒業し「再び学んで他のために」を实践されている〈わ〉には、多くを期待している。豊かな人生経験、知識、技術をお持ちで、多彩な人材がおられる。少子高齢化社会の今、この人材を生かさぬ手はないでしょう。

(取材・写真 広報・永野 知己)

